1985年　メキシコ地震被害調査の写真

写真-1　エル・インフェルニージョダムでの記念撮影．右から埼玉大学渡邊啓行教授，一人おいて，森伸一郎愛媛大学助教授，シー・エス研究所泉博允部長，岩楯，田蔵隆清水建設部長である．

写真-2　エル・インフェルニージョの事務所で，被害概要について現地の人から説明を受けている．埼玉大学の渡邊先生と筆者．

写真-3　ラサロ・カルディナスのバスサス河に架かるコアステ橋の被害

写真-4　ラサロ・カルディナス市内の建物の被害

筆者は，地震工学の分野で口を糊する者の一人（いまだ30年程度）として，地震を構造物の壮大な破壊実験ととらえ，地震被害調査により被害実態を正確に把握し，その原因の究明を図り今後の耐震・防災対策に資することが，われわれに課せられた使命であり，土木工学，地震工学の教育，研究の原点の一つと考えている．私自身，1970年に（財）電力中央研究所に入所後，1974年伊豆半島沖地震（M 6.9）の被害調査をしたのが最初の経験であり，1975年大分地震，1978年宮城県沖地震，1993年の釧路沖地震，1993年北海道南西沖地震等の被害調査，さらに1985年のメキシコ地震調査を行い，その後，1994年4月都立大学に移ってからも，1995年阪神・淡路大震災，1999年台湾集集地震，2001年のインド西部地震の被害調査に至るまで，日本および海外における多くの地震被害調査を実施してきた．その都度，地震の脅威，自分の勉強および経験不足などを痛感させられるが，新しい発見も多く，これらの経験が，現在の自分の教育・研究のパワーの源となっていることは確かである．

最近，海外の地震被害に調査団を派遣することに対して，いろいろな意見があるようであるが，私個人としては，国際協力，国際貢献の面からはもちろん，研究，教育の面でも非常に重要であり，特に若い人が積極的に参加することを期待している．

ここでは，1985年の9月に発生したメキシコ地震（Ms 8.1）被害調査に参加したことについて紹介する．メキシコ地震では，地震被害は太平洋側の震源域よりも，そこから約400 km離れたメキシコ市に集中した．土木学会では，地震発生から約4か月後に，22名の大調査団（団長：片山恒雄東京大学教授：当時）を編成し，1986年1月7日から13日までの7日間にわたり，メキシコ市はじめ震源域などメキシコ国内を4班に分かれて調査した．筆者は，当時，電力中央研究所に所属し，アメリカカルフォルニア州パラアルトの電力研究所（EPRI）に海外出張中であったが，急遽アメリカより現地参加する機会を得た．

渡邊啓行埼玉大学教授を班長とした3班に配属され，渡邊班長，岩楯，泉博允氏（大成建設（当時），現在：シー・エス研究所），田蔵隆氏（清水建設技術研究所），森伸一郎（飛島建設技術研究所（当時），現在愛媛大学）の5人のメンバーで，メキシコシティでの全体調査の後，グアダラハラ市から，小さなマイクロバスに乗り込み，グスマン市，アパチンカン市，ラサロカルディナス，アカプルコに至る約600 kmを4日間で踏破し，主として震源に近い地域の道路，ダム・橋梁など土木構造物の被害調査を行った．調査途中のグスマン市からアパチンカンに至る山岳道路で，つい1週間前に山賊が出たから気をつけるようにと驚かされたり，軍隊の検閲を受けたり，また，途中の砂漠でサソリやイグアナに出逢ったりなど，身の震えるような体験もしたが，貴重で楽しい調査ができたと考えている．

各メンバーとも，現在，地震工学の第一線の研究者・技術者として，各職場で活躍しているだけではなく，土木学会，地震工学委員会のメンバーとしてその中枢を担い，国内外で活躍されている．地震被害調査後，このメンバーが中心となって「メキシコ会」を作り，学会活動とは別に，1年に1，2回友好を深めている．

（東京都立大学　岩楯敞広）